

「神隠し」 水貴

走馬灯霊安室で母と逢う

母逝きてニート願望つゝのる秋

検案の紺の浴衣で母戻る

お母さんと五編唱えて白雨中

夕涼みドライアイスの母にある

みんなや動かぬ母の髪洗う

母逝きて父呆けはじめ晩夏光

通夜の前母の冷たき汗を拭く

短夜や良い人のまま幕降ろす

亡き母の口元動く夜の秋

初めての化粧の母や朝曇

死化粧の愛しく母の昼寝かな

母葬る日の草花の切火かな

白昼の神隠しなり夏の足袋

短夜や眠剤父に母の通夜

羅や黒借りてきて母に添う

四日目の死化粧を足す残暑かな

身に沁むや熱くて白き骨拾う

祭壇の花畑して母眠る

夕焼けの通夜のバス来る震度四

雲の峰茄子紺衣の棺の母

朝顔の萎えていくかな母葬る

逝く母とすれ違うかな鈴虫音

口惜しいと伯母に叩かれ菊白し

二百十日遺骨で帰る母抱いて

百日紅送り火かなと昼下がりに

糠漬けを形見分けとし九月尽

手の中の小さき母はビール飲む